

イントロダクション

メモリ・イン・モーション：時間と記憶

タナカノリュキ+下條信輔



タナカ●ようこそいらっしゃいました、タナカノリュキです。ルネッサンス ジェネレーション、今年で6回目になります。

さて今年のテーマは「メモリ・イン・モーション」、簡単に言ってしまうと時間と記憶を取り上げるわけですが、このテーマは昔からよく俎上には乗っていたんです。でもこれがなかなかやっかいな代物で、結果としては見送る形になっていたわけですが、今回は下條さんのほうから今年は時間と記憶で行こうという話が出たんです。そのあたりのお話を下條さんのほうからお願いします。

下條●こんにちは、下條信輔です。よろしくをお願いします。

実は時間と記憶というテーマは、タナカさんと初めて一緒にやった展示会のおかげから僕らの問題意識の中にあっただけなんなんです、扱いにくくて先送りしてきたものでもあるんです。なぜかという、これほど私たちの身近にあって、いやもしかすると体内にあって、正体不明のものはないと思うんですよ。

タナカ●僕の場合は、最近、映画とかを観ていると、結局シェイクスピアの時代から続いている定型の物語の焼き直しなんじゃないか、というような感じをすごく受けるんですよ。同じクリエイティブに関わるものとして、そのあたりにちょっと疑問があるんです。

下條●それは今日の話の中の一つの大きなポイントにしたいと思うんですが、ちょっと先走った話をすると、物語とは人間の認知系の中での記憶装置だと考えることが出来るわけですが。それは記憶を助けると同時に、生の経験を失わせてステロタイプの中に押し込んでしまう装置というふうに言うことが出来る。ただ今の人たちは物語に感動するというよりも、物語に付随してくる生理的な刺激に対して情動的に反応する傾向があってね。つまりそういう生理的なボタンを押すことと物語がパターン化するという両方の側面が同時に起きていると思うんですよ。

タナカ●なるほどね。まあ、詳しい話は追々出てくるとして、僕の中にも記憶って本当に自分の体の中に全部入っているものなのかとかいろいろな疑問があるんです。こういう疑問から、今日のテーマである時間と記憶が浮上してき

たわけです。

下條●ここでは大枠の話をしたと思うんですが、まず時間という問題は、客観的に見ると時間なんです、個人の心の問題として捉えると主観的な時間という話になって、それはつまり記憶という問題に結びついてくるわけなんです。記憶というのは比較的分かりやすく身近な存在でもあるので、このあたりから話を始めようと思います。ひとりで記憶と言ってもいろいろあるわけですが、最も個人的な記憶、つまり自分に関わる出来事についての記憶をエピソード記憶と呼びます。例えばタナカさんが、もっとも脳裏に焼きついている場面とかヒトとかありますか？

タナカ●個人的なところで言うところには小さいころに見た風景とかもありますが、これは皆さんそれぞれにあると思うので、社会的なことと言うと、ベルリンの壁の崩壊かな。あとは子供のころに親に連れていかれた『2001年宇宙の旅』という映画が衝撃的でした。僕はカメラとかゴジラみたいな普通のSF映画を期待していったんだけど、観てみたら何だこりゃって感じがあって、よく覚えてますね。

下條●私の場合は、小学校1年生ぐらいだったと思うんですけど、三島由紀夫が自殺した時に号外が駅で配られていて、その1面に、あれは多分、自衛隊の駐屯地の部屋だと思うんですけど、真っ暗やみの部屋の中に、うっすらと丸いボールのようなものが転がっているモノクロ写真が載っていて。それは首だったわけだけど、それが鮮烈に焼きついています。そういうような記憶を指してエピソード記憶と呼ぶわけですが、ではここで、都立大学の認知心理学者、仲真紀子先生のエピソード記憶に関するビデオレクチャーをご覧ください。

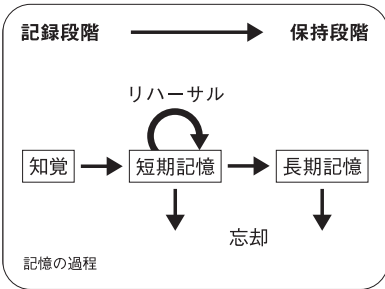
ビデオレクチャー

エピソード記憶入門

仲真紀子



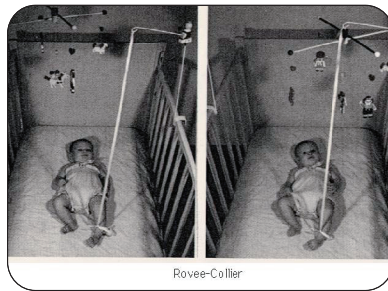
ここでは、エピソード記憶はどのように発生するのか、高齢者になったときに多く思い出すのはどういう記憶なのか、という2つのテーマでお話します。



日々私たちはいろいろな経験をしています。それがすべて記憶に残るといってはいけません。知覚された情報の幾分か短期記憶に入って、そこでリハーサルされたものが長期記憶へと移行してゆくことになるんです。ですから、多くの情報は忘却されてしまうわけです。そして長期記憶に入った情報を大別すると「手続き的知識」と「宣言的知識」の2つになります。「手続き的知識」というのは、例えば自転車の乗り方のように、やれば出来る、やることで知っていることがわかるような知識です。その一方、「宣言的知識」というのは、言葉で説明できる知識のことを指していて、これは「意味記憶」と「エピソード記憶」とに分けることが出来ます。「意味記憶」とは、水は酸素と水素でできているといったいわゆる知識がここに入ります。では「エピソード記憶」とは、ですが、これは、いつ・だれが・どこで・なにを・どうした、というような体験に基づく記憶です。例えば皆さんが昨日の夕飯の様子をありありと再現できるようであれば、それはエピソード記憶ということが出来るわけです。これらの区別は脳損傷の患者さんの所見であるとか、あるいはどの発達段階で発生してくるかというようなことで、生理学的にも分ける根拠が認められています。

では、このエピソード記憶はいつごろからどのように発達してくるのでしょうか。Rovee Collierというヒトの実験を紹介します。まず赤ちゃんの足にヒモを結んで、通常どの程度足を動かすかを測定しておきます。そして、次にヒモの先をモビール（ガラガラのようなもの）に繋げて、赤ちゃんが足を動かす

とモビールが動くようにしておきます。赤ちゃんは足を動かすとモビールが動くことに気づき、一生懸命足を動かすようになるわけです。で、十分体験させたらそのモビールを外してしまい、一定期間たってからまたモビールをぶら下げると、覚えている赤ちゃんはヒモを結ばなくても喜んで足を動かし始めるわけです。その統計によれば、覚えている期間は2カ月児であれば2週間、4カ月児であれば4週間とされています。ただこの場合、赤ちゃんが足を動かしてくれるから観察できるわけですし、この時期の赤ちゃんにはまだ言葉がありませんから、言葉として記憶しているわけではないのだろうと言えるわけです。



では、いつごろから言葉としてエピソード記憶を伝えられるようになるのでしょうか。7人の赤ちゃんの1歳から4歳ぐらいまでを家庭訪問してエピソード記憶の発生を調査した上原さんの研究によれば、大体2歳から3歳の間に断片的に現れてくるようなんですね。例えばブドウのおモチャをみて、ブドウアイスと言ったり。それはお母さんによるとおばあちゃんの家で食べたブドウアイスを思い出したんだと思いますということなんですね。それがだんだんで過去形で語られるようになるんですが、当初は語られるすべてが体験した事実というわけではないようなんですね。例えば、3歳9カ月の子どもが「赤ちゃんの時、オッパイから脇にあったシャベルを使って穴を掘って出てきた」と言ったりするわけです。エピソード記憶を言うときにはそれは事実でなければいけないわけですが、子どもたちはまだそれがわからないんですね。続いて大事なものは、時間の概念です。岩淵さんたちの調査によると、3歳ぐらいから今日という概念を理解し始めるんですが、6歳になっても明後日とか一昨日というような概念は理解しきれないんですね。面白いのは、未来の明日・明後日のほうが早く理解が始まって、昨日・一昨日というのは後からついてくる点ですね。

時間を表す言葉 (岩瀬・村石, 1976)

	3歳	4歳	5歳	6歳
あさって	1	22	49	69
あした	53	81	92	100
きょう	79	93	97	100
きのう	29	66	85	95
おととい	0	9	26	46

お子さんが正しく使えるものを○で囲んでください。

以上のことから、エピソード記憶の特徴をまとめると次のように言うことが出来ます。いつ・どこで・だれが・なにを・どうした、という情報が含まれるだけでなく、どう感じたかどう思ったかという情報も含まれる。意味記憶いわゆる知識ではなく、体験の再現感がある。空想ではなく現実を語る。これらの条件を満たしたときにエピソード記憶と呼ばれるわけですね。このように集められてゆくエピソード記憶は、高齢者になったとき、果たしてどのような形で思い出されるのでしょうか。

下の単語を見たときに最初に心に浮かぶ出来事を思い出してください。そのことについてしばらく思いをめぐらし、それから以下の質問に答えてください。

飴

- Q1: その時の様子が見えますか？
よく見える—少し見える
あまり見えない—全く見えない
- Q2: その時の様子が聞こえますか？
- Q3: 再び体験しているように感じますか？
- Q7: それはいつごろの出来事ですか？ ____歳

手がかり語法調査と呼ばれる調査があります。被験者に一つの単語を見せて、その言葉から最初に心に浮かぶ出来事についてもらい、いくつかの質問をしてエピソード記憶を探るものなんですが、最後にそれがいつごろのことだったか時期を尋ねるんですね。それを30単語とか多いときには100単語ぐらい応えてもらうんです。この調査を高齢者を対象に実践したところ、出来事が起きた年齢というのが、1月前ぐらいまでのことは当然のことながらたくさん思い出されるわけですが、過去のことで言うと、10代、20代の頃の出来事が非常に多く思い出されるんですね。これは思い出に限らず、音楽や感銘を受けた本、重要な社会的出来事といったものを尋ねても同じです。ですから、本日そちらの会場にいらっしゃっている方が10代、20代中心だとするならば、毎日毎日を感じを持って生きていけば、それが将来、感銘をもって思い出せる出来事になるのだと思います。